

『大阿弥陀経』 訳注 (八)

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、『大阿弥陀経』下巻、大正蔵第12巻、312a2-c27の部分である。いわゆる「三毒段」の部分にあたる。

内容を紹介すると、次の六段に分かれる。

所有欲による苦しみ

世間では、金持ちも貧乏人もみな所有欲のゆえに愁い悩んでいる。金持ちは持っている財産が無くなるのではと心配し、貧乏人は財産が欲しいと悩む。その結果、心ばかりか身も病んでいる。さらに死後には悪趣におもむくことになる。(312a2-26)

憎しみによる苦しみ

家族・親族は互いに敬愛しあい、憎しみあってはならない。そもそもこの世での憎しみは来世では大きな恨みとなる。憎む相手とは、生まれ変わっても出会い、互いに報復しあうことになる。善悪の業は転生した所まで追いかけてくる。元気な間に善業を行え。(312a26-b12)

無知・無信による苦しみ

世間の人々は因果応報・輪廻転生などを信じない。これは先祖が善業・仏道に関して無知であったため、その子孫は何も語り聞いていないからである。死は定めなく、若い者が年寄りより先に死ぬこともある。誰もやがては死ぬのだが、世間の人々は、教えを信じず、享樂を追求している。彼らはやがて悪趣に転生し、苦しみを受ける。(312b12-29)

愚昧な追慕

家族・親戚の者が亡くなると、その悲しさから離れられず、仏の教えを受け容れず、心を閉ざし、仏道に出会わないまま、寿命が尽きる。(312b29-c7)

私利追求の生活が悪趣を招く

世間の人々は、金持ちも貧乏人も老若男女みなあわただしく欲望を貪り、せかせかして、安らぎがなく、他の人へ悪意をいだいて生活している。その結果、寿命が来る前に、命尽き、悪趣にずっと留まることになる。(312c7-14)

悪業を止め、善業をなせ

仏は上の様に世間の有様を語った後、「悪業を止め、善業をなせ。愛情・欲望を享受するな。仏の教えを信じ、修行する者は私の弟。戒を学ぼうとする者は私の弟子。出家して沙門・比丘になるものは私の子孫。阿弥陀仏の国に生まれようと願う者は、智慧と勇敢さを持ち、尊敬される。」と諭して、さらに「疑問があれば尋ねよ」と言う。(312c14-27)

底本には高麗蔵所収本を用いた。

本訳注の原稿に目を通して、誤りを指摘して下さった佐藤直子さん、橋本貴子さん、佐々木大悟氏に深く感謝致します。

和 訳

(大正蔵第12巻, 312a2-c27)

(所有欲による苦しみ)

1) 「世の人々は、軽薄・卑俗²⁾、重要でないことを争いあっている。ここ、(すなわち)ひどい悪と苦しみにみちた中で³⁾、励んで生計を立てて⁴⁾、(家族を)養っている⁵⁾。位の高い者も卑しい者も、金持ちも貧乏人も、年寄りも若者も、男も女も、

-
- 1) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984 : 307を参照。
 2) 薄俗 HD. 9. 575b は「軽薄の習俗」と解釈し、『漢書・元帝紀』「民漸薄俗，去禮義，觸刑法。豈不哀哉！」などを引いている。
 3) 共於是處劇惡極苦之中 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「於此劇惡極苦之中」(274b26)と改められている。
 4) 治生 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「營務」(274b27)と改められている。
 5) 相給活 『平等覺經』は同じ。この「相」は、動詞の前に置いて、行為が相手に及ぶことを示す。「相」のこの用法については、HD. 7. 1135b (3) (『史記』などでの用例が挙げられている)やGHX. 646-647 (『詩經』『漢書』などでの用例が挙げられている)を参照。「給活」は、仏典にのみ見える表現。本經と次の二例は「養う」の意味。支謙訳『三品弟子經』「希望供養，欲得錢財穀帛，給活妻子。」(T. 17, No. 767, 701a19f.); 慧覺等訳『賢愚經』「爾時薩薄以三千兩金。千兩辦船，千兩辦糧，千兩用俟船上所須。餘故大有給活妻子。便於海邊施作大船。」(T. 4, No. 202, 422b2f.)。それ以外は、「自給活」で「自らを養う，生計を立てる」の意味で使われている。例えば支謙訳『梵網六十二見經』「有異道人，受人信施食，作畜生業，以自給活。」(T. 1, No. 21, 265a19f.); 法立・法炬訳『大樓炭經』「復次穀貴劫時，人行掃街，市里均穀，以自給活。」(T. 1, No. 23, 302b26f.); 僧伽提婆訳『增壹阿含經』「後世人母當爲女作媒，將他男子與房室。母住守門，從得財物，持用自給活。父亦同情伴聾不知。」(T. 2, No. 125, 830a20f.); 法顯訳『大般泥洹經』「時有野人遊行澤中得 /

みな⁶⁾ 財産のことを心配している。持つ者も持たない者も区別無く、思い煩いは同じ。うろたえ⁷⁾、愁い苦しみ、思案を重ね、考えを巡らし⁸⁾、心のしもべとなり⁹⁾、安らく時はない。

田畑を所有するものは、田畑のことを心配し、家宅を所有するものは、家宅のことを心配し、牛を所有するものは、牛のことを心配し、馬を所有するものは、馬のことを心配し、家畜¹⁰⁾を所有するものは、家畜のことを心配し、奴婢を所有するものは、奴婢のことを心配し、衣服・財産・金・銀・宝物を所有するものは、それらのことを心配する¹¹⁾。思いに思い、ため息を繰り返し¹²⁾、心配と不安にかられる¹³⁾。「不意に、突然の洪水・火事・盗賊・恨みをいだく者や債権者¹⁴⁾によって、流されたり、焼かれたり、強奪されたり¹⁵⁾、乱入されたり¹⁶⁾、溺れたりする¹⁷⁾」(のではないかと)。

-
- ゝ、此乳牛，便搆其乳，以自給活。欲作酪酥，不知法用。盛以弊器，冷暖不適，竟不成酪，亦不得酥。」(T. 12, No. 376, 865a20f.); 仏陀什訳『五分律』「或耽酒食，不能除斷；或專作邪命，以自給活。」(T. 22, No. 1421, 192c12f.)。『無量寿經』では「自給濟」(274b27; 「自らを養う，生計を立てる」)と改められている。
- 6) 皆當共 『平等覺經』は同じ。『無量寿經』では「共」(274b28)と改められている。「皆當共」は「皆悉共」の誤写か。本經の別の箇所でも「皆當」を「皆悉」の誤写と推測した(訳注[四]注[12])。「皆悉共」は、類義の字を三つ重ねた表現で仏典に多出する。失訳『不退轉法輪經』「彼諸菩薩皆悉共取七寶蓮華若干種色。」(T. 9, No. 267, 227b1f.); 闍那崛多等訳『起世經』「世間衆生皆悉共有三種惡行。」(T. 1, No. 24, 346a2f.); 僧伽提婆訳『中阿含經』「彼時八萬四千夫人及女寶皆悉共前詣大善見王。」(T. 1, No. 26, 517b12f.); 地婆訶羅訳『方廣大莊嚴經』「諸天龍鬼神皆悉共瞻待」(T. 3, No. 187, 541a23f.)。
- 7) 屏營 「屏營」(bing ying)は同じ韻字を重ねた疊韻語。「さまよう；うろたえる」の意味。HD. 4. 41aには『国語・呉語』「王親独行，屏營彷徨於山林之中」などが引かれている。
- 8) 累念思慮 『平等覺經』は同じ。『無量寿經』では「累念積慮」(274b29)と改められている。
- 9) 爲心走使 底本の「爲心使走」を『平等覺經』「爲心(←之)走使」(293c24)，『無量寿經』「爲心走使」(274b29)に拠り改める。「走使」は「そば仕え，走り仕え；仕える」の意味。Krsh (1998). 618, Krsh (2001). 410を参照。
- 10) 六畜 馬・牛・羊・鶏・犬・豚を指すが，ここでは家畜の総称。HD. 2. 41aには『左伝』などでの用例が引かれている。
- 11) 復共憂之 『平等覺經』・『無量寿經』も同じ。「共」は「皆，すべて」の意味であろうか。
- 12) 累息 HD. 9. 789aには『楚辭』などでの用例が引かれている。
- 13) 愁恐 『平等覺經』は同じ。辞書類に採られていない。『無量寿經』では「愁怖」(274c3)と改められている。
- 14) 怨家債主 (←怨主債家) 諸本に「怨主債家」とあるが，『平等覺經』(293c28)と『無量寿經』(274c3)により，「怨家債主」と改める。
- 15) 擊 (←繫) 本經の高麗藏本・房山石經本と『平等覺經』の高麗藏本・房山石經本には「繫」とあるが，本經・『平等覺經』の宋版などには「擊」とある。『無量寿經』では「劫奪」(274c4)と改められている。
- 16) 唐突 本經の宋版などには「搪突」とある。『平等覺經』の宋版などには「搪突」とある。HD. 3. 368a「唐突」には『詩經・鄭玄箋』などでの用例が，またHD. 6. 816b「搪突」には魏代『人物誌』などでの用例が引かれている。「撞突」(HD. 4. 1272a; 杜甫)・「棠突」(曾良『敦煌文獻字義通釈』廈門 2001: 廈門大学出版社，p. 144)とも書かれる。 /

とても不安で¹⁸⁾、心臓がときどきし¹⁹⁾、ほっとする時がない。憂いを心のうちにいだき²⁰⁾、怒りの気を心のうちに積もらせ²¹⁾、(その結果)胸や腹を病み²²⁾、憂いと苦しみは離れない²³⁾。(その)意志は頑なで、全く寛容でない²⁴⁾。傷つけられたことで²⁵⁾

、いずれも“táng tú”という発音。tで始まる語を重ねた双声語。擬声・擬態語である。

- 17) 唐突没溺 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「消散磨滅」(274c4)と改められている。
- 18) 憂毒 HD. 7. 687bには漢代の用例が引かれている。「毒」にも「憂う」の意味がある(HD. 7. 822bには『列子』などでの用例が引かれている)。従って「憂毒」は同義語を重ねた表現。「とても悲しむ」「とても心配する」の意味。仏典にも用例は多い。例えば、曇果・康孟詳訳『中本起経』「其年七歳、得病、便亡。其父憂毒、臥不安席、不復飲食。」(T. 4, No. 196, 160a1f.); 鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』「譬如新喪父母甚大憂毒、菩薩亦如是行般若波羅蜜、惡魔甚大憂毒。」“世尊！但一惡魔愁毒、三千世界惡魔皆悉愁毒耶？”“須菩提！是諸惡魔皆悉憂毒、各於坐處不能自安。”(T. 8, No. 227, 579a12f.)など。
- 19) 忪忪 心配で心臓がときどきする様。あるいはおそれおののく様。HD. 7. 434bには『魏書』での用例が引かれている。GH. 777aは『慧琳音義』の解釈を列挙している。本経の後の方にも「王法施張、自然糺舉、上下相應、羅網網紀。榮榮忪忪、當入其中。」(315b19f.)と出る。その他にも、康僧会訳『六度集経』「山神愴然、爲作大響有若雷震。母時採果、心爲忪忪。仰看着天、不覩雲雨。」(T. 3, No. 152, 9c27f.); 同「弟……奪書之治師所。治師承書、投弟子火、父心忪忪而怖、遣使索兒。……父驛馬追。兒已爲灰矣。」(26a23f.); 瞿曇般若流支訳『正法念処経』「若蟲行時、令人頻申、心動忪忪、或如失身、或身動搖、不能睡眠、……」(T. 17, No. 721, 386b17f.); 同「見冷唾風、若不調順口中味甘。其心忪忪、不憶飲食。若欲坐禪、則生疑念。舌重難語、或咽喉痛、氣噫臭惡、心中臭氣。……」(393a21f.)。訳注(三)注(47)「忪忪」も参照。
- 20) 結憤胸中 『平等覚経』と『無量寿経』には「結憤心中」とある。「結憤」は本経の別の箇所でも「雖不臨時、應急相破、然之愁毒、結憤精神。」(312b2f.); 「爲癡欲所迫、隨心思想。不能復得、結憤胸中。」(315b15f.)と出る。また、本経の別の箇所に出る「憤結」と同じ意味。すなわち「或時家室、中外、父子、兄弟、夫婦至於死生之義、更相哭泣、轉相思慕、憂念憤結、恩愛繞續」(312b29f.)。「憤」は、気が充滿している様子(朱子然『古漢語詞義叢考』成都2000、巴蜀書社、p. 9-10)、憂いや怒りが心に鬱積している意味(HD. 7. 731a; GHZ. 175b)。次の「穡氣恚怒」と類句。
- 21) 穡氣恚怒 「穡」は「蓄」に同じ。『平等覚経』に「穡」とあるのは誤写。また本経で「恚怒」とあるところ、『平等覚経』の高麗藏本には「毒怒」とあるが、おそらく誤写。他の諸本には本経と同じく「恚怒」とある。『無量寿経』ではこの表現が省かれている。
- 22) 病在胸腹 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』ではこの表現が省かれている。
- 23) 憂苦不離 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「不離憂惱」(274c5)と改められている。
- 24) 適無縱捨 「適無」=「適不」は「まったく～ない」という意味。訳注(五)注(100)の「甚無」「甚不」と同じ用法。「適無」の漢訳仏典での用例は、何亞南「漢譯佛典與後漢詞語例釋」『古漢語研究』1998年第一期、pp. 64-65およびHu 188-189に網羅的に挙げられている。後者は「適」を「応当」(～すべきである)の意味で解釈するが、間違い。「まったく～ない」という意味の「適不」の用例は次の通り。慧覺等訳『賢愚経』「婦啼而言：“汝所欽美阿疊賊奇、自汝去後、常見侵凌。我適不從。摧裂我衣、壞我身首。汝畜弟子。云何乃爾？”」(T. 4, No. 202, 423c19f.); 支婁迦讖訳『般舟三昧経』「心一反念、佛悉在前立。一切適不復願、適無所生處。」(T. 13, No. 418, 904a25f.)。「縱捨」は「釈放する。赦す」の意味。HD. 9. 1002b「縱舍・縱捨」には『莊子』などでの用例が引かれている。
- 25) 或坐摧藏 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「或坐摧碎」(274c6)と改められている。この「或」(ここでは「場合は」と訳した)は、後に「或時(坐之、終身天命)」(312a24)とあるのを参照。「坐」は「～の勢で、～によって」の意味(GHX. 886-887を参照)。「摧藏」はここでは「傷つける、痛めつける」の意味。HD. 6. 838bには漢代、王昭君「怨詩」「離宮絶曠、身體摧藏。」の例を挙げている。「摧藏」は詩文では「心を痛め

命を失った場合は²⁶⁾、ほいと捨て去られ、誰一人として後に従う者はいない。位の
高い者・金持ちには²⁷⁾、このような憂いと恐れがあり²⁸⁾、このように苦しむ²⁹⁾。
度々悪寒と熱病を病み³⁰⁾、痛みと同居している。

身分の低い貧乏人は³¹⁾、貧窮し、貧しさに苦しむ³²⁾。田畑がなければ、田畑が欲
しいと悩み、家宅がなければ、家宅が欲しいと悩み、牛がなければ、牛が欲しいと悩
み、馬がなければ、馬が欲しいと悩み、家畜がなければ、家畜が欲しいと悩み、奴婢
がなければ、奴婢が欲しいと悩み、衣服・財産・日用品・飲食物などがなければ、や
はり欲しいと悩む。たまたま一つが手にはいると、もう一つ欲しくなり、これがある
と、あれも欲しくなり、ひとしなみに³³⁾持ちたいと思う。たまたま束の間、全部を
所有することができても³⁴⁾、すぐにまた無くなってしまう³⁵⁾。こうして苦しみが生

ゝる、悲しむ、嘆く」の意味でしばしば使われる(HD. 6. 838b; 蔣紹愚『唐詩語言研究』鄭
州 1990: 中州古籍出版社, p. 324; 王雲路『漢魏六朝詩歌語言論稿』西安 1997: 陝西人民
教育出版社, p. 7参照)。上述の様に『無量寿經』では「摧碎」と改められている。

- 26) 終身亡命 『平等覺經』には「終亡身命」(294a2)とある。『無量寿經』では「身亡命
終」(274c6)と改められている。後には「終身天命」(312a24)という類似の表現があり、
それは『平等覺經』『無量寿經』も同じ。
- 27) 尊貴豪富(←尊卑豪貴貧富) 本經には「尊卑豪貴貧富」とあり、『平等覺經』
(294a3)と『無量寿經』(274c7)には「尊貴豪富」とある。この部分は、田地などを持つ
金持ちのことを述べ、次の段落で貧乏人のことを述べているから、『平等覺經』の読みが本
來的と考えられる。
- 28) 有是憂懼 『平等覺經』には「有此憂懼」(294a3)とあり、『無量寿經』では「亦有斯
患、憂懼萬端」(274c7)と改められている。
- 29) 勤苦若此 高麗藏本・房山石經本には「勤苦此」とあるが、本經の宋版などと『平等
覺經』・『無量寿經』の読みにより改める。「苦」と「若」が似ているために起きた一種の重
字脱落(haplography)。後には、「勤苦如此」(312a23)とある。「勤苦」は先秦の文献から
見える表現だが、仏典では「苦しみ、苦しみを受ける」の意味で使われる。Krsh (1998).
330-331, Krsh (2001). 419-420. 訳注(二)注(22)も参照。
- 30) 結衆寒熱 『平等覺經』・『無量寿經』も同じ。「寒熱」は悪寒と熱病のことか。吉藏撰
『無量寿經義疏』には「結衆寒熱」者結之意集。意: “行苦、招寒熱病。”(T. 37, No.
1746, 123c4)。
- 31) 小家貧者 『平等覺經』は同じ。『無量寿經』では「貧窮下劣」(274c8)と改められて
いる。「小家」は「身分の低い貧乏人、貧しい暮らしの家」の意味。HD. 2. 1617bには『管
子』などでの用例が引かれている。
- 32) 窮困苦乏 『平等覺經』には「窮困乏無」(294a4)とある。『無量寿經』では「困乏常
無」(274c8)と改められている。「窮困」は貧窮の意味。HD. 8. 461bには『荀子』など
での用例が引かれている。本經の「苦乏」(「貧しさに苦しむ」と『平等覺經』の「乏無」
(「すつからかん」)のどちらの読みが本來的か決め難い。『無量寿經』の読みは後者を踏ま
えている。
- 33) 齊等 同義字を重ねた表現。HD. 12. 1433bには『積名』などでの用例が引かれている。
- 34) 適小具有 『平等覺經』は同じ。『無量寿經』では「適欲具有」(274c12)と改められて
いる。
- 35) 賜盡 本經の高麗藏・宋版(房山石經本は欠損)および『平等覺經』の宋版はこう読
む。本經の元・明本及び『平等覺經』の高麗藏・元・明本には「賜盡」、房山石經本には
「斯盡」(「斯」=「盡」; HD. 6. 1063a [10], GH. 983b [18]-[23]を参照)とある。「賜」に
も「尽きる」の意味がある(HD. 10. 259a [5]には『方言』「賜、盡也」などの例がノ

じ³⁶⁾、もう一度手に入れようとしても、³⁷⁾ 思うだけ無駄で、すぐに手に入れることが出来ず、心身ともに疲れきり、いても立ってもいられない。(身分の低い貧乏人も) 次々と悩みが生じ、このように苦しく³⁸⁾、³⁹⁾ (悩みが) 心を苦しめつづけ、うらみのあまり激しく怒る。(位の高い者・金持ち同様) 彼らもまた度々悪寒と熱病を病み⁴⁰⁾、痛みと同居している。

このことによって⁴¹⁾、⁴²⁾ 命を失い、早死にする場合もある。⁴³⁾ それでもやはり善行や仏道を修めようとはしない。寿命が尽き死ねば⁴⁴⁾、⁴⁵⁾ みなひとりで遠くに去り行かねばならない。⁴⁶⁾ (死後) おもむく境涯があり、それには善い境涯と悪い境涯があるということを誰も知らない。

(憎しみによる苦しみ)

⁴⁷⁾ もし⁴⁸⁾、世間の人々が⁴⁹⁾、父子・兄弟・夫婦・家族・父方や母方の親戚として、

、引かれている)。後には「偶」(HD. 1. 1733a)と書かれる様になった。従って、「賜盡」は同義字を重ねた表現。本経の後にも、「尽きる」の意味の「賜」が出る。すなわち「欲得他人財物、用自供給。消散靡盡、賜(元・明本は「偶」)復求索。」(314a22f.; =『平等覚経』296a23)。また「盡偶」で「尽くす」の意味の例も本経に出る。「今世作惡、盡偶諸善」(314c9; 『平等覚経』では「今世作惡、福德盡偶」[296c10]とある)。『無量寿経』では「靡散」(274c12)と改められている。

36) 苦生 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「憂苦」(274c12)と改められている。
37) 思想無益、不能時得 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「不能時得、思想無益」(274c13)と改められている。「時」は「すぐに」の意味(ZXYL. 475-476を参照)。

38) 勤苦如此 『平等覚経』(294a11)・『無量寿経』(274c14)には「勤苦若此」とある。

39) 焦心不離、恚恨獨怒 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』(274c14)では省かれている。「焦心」は本経では後に「慳富焦心、不肯施與」(314a16)という例があるが、そこでは「心を焦がす、いらだつ」の意味。「恚恨」は「うらみ; いかり」の意味。HD. 7. 490aには『史記』などでの用例が引かれている。「獨」は「とても、非常に」の意味。訳注(六)注(88)を参照。

40) 結衆寒熱 注(30)を参照。

41) 坐之 注(25)を参照。

42) 終身天命 注(26)を参照。「天命」は「夭折する、短命である」。HD. 2. 1459aには『論衡』などでの用例が引かれている。

43) 亦不肯作善爲道 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「不肯爲善、行道、進徳」と「進徳」が付加されている(274c15)。

44) 壽命終盡死 『平等覚経』には「壽命盡死」(294a13)とある。『無量寿経』では「壽終身死」(274c16)と改められている。

45) 皆當獨遠去 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「皆」が省かれている(274c16)。

46) 有所趣向、善惡之道、莫能知之 『平等覚経』(294a14)と『無量寿経』(274c17)には「……莫能知者」とある。類似の表現が後にも出る。「殊無有能見人死生有所趣向、亦莫能知者。適無有見善惡之道、復無語者」(312b18); 「不知所從來生、死所趣向」(315a14); 「開導死苦、善惡所趣向有是」(315a18)。「所趣向」も「道」もおそらく、「六趣」「六道」という時の「趣」「道」と同じ意味。

47) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 309を参照。

48) 或時 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』(274c17)では省かれている。ここでは「もし～場合は」と訳した。注(25)、(55)、(113)を参照。

この世界で暮らす⁵⁰⁾ 場合は、互いに敬愛しあい、憎みあってはならず⁵¹⁾、持てる者は持てない者に与え⁵²⁾、貪り惜しむことがあってはならない⁵³⁾。ことばと顔色は柔和にして⁵⁴⁾、相手に逆らうべきではない。もし⁵⁵⁾ 対抗心があり、怒ることがあれば、(312b) この世での恨みの心はわずかに憎む程度のもので、来世ではだんだん激しくなり大きな恨みになってしまう⁵⁶⁾。なぜか。⁵⁷⁾ 今のことに、互いに傷つけたいと思う。その場で、即座に攻撃しなくても⁵⁸⁾、そのことを悩み苦しみ⁵⁹⁾、怒りを心のうちにいだき⁶⁰⁾、(怒りは) 自然に意識に刻まれる⁶¹⁾。(その相手とは) 離れられない。⁶²⁾ 双方、生まれ変わって出会い、互いに報復しあうはずである。

人々は世間の愛欲の中で、⁶³⁾ ひとりでやってきて、ひとりで去っていき、ひとりで生まれ、ひとりで死ぬ。⁶⁴⁾ 苦楽の境涯に至る際、自分で直面せねばならず、誰も

49) 世人 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「世間人民」(274c17)と改められている。

50) 居天地之間 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』(274c18)では省かれている。

51) 不當相憎 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「無相憎嫉」(274c18)と改められている。

52) 有無當相給與 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「有無相通」(274c18)と改められている。

53) 不當有貪惜 『平等覚経』には「不當有貪」(294a17)とある。『無量寿経』では「無得貪惜」(274c19)と改められている。

54) 言色當和 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』には「言色常和」(274c19)とある。後にも、「不犯諸惡，言色當和，身行當專」(315c9)とあり、それに対応する『平等覚経』には「……，言色常(宋版などは「當」)和，……」(297c14)とある。「當」「常」「尚」の交替に関しては、訳注(一)注(101)・訳注(六)注(28)など参照。

55) 或儻 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「或時」(274c19)と改められている。「或」も「儻」も「もし」の意味。同義字を重ねた表現。

56) 至(←致)成大怨 本経の読みを『平等覚経』・『無量寿経』の読みにより改める。

57) 如今之事更欲相害 難解。『平等覚経』には「今世之事更欲相害害」(294a19)とある。『無量寿経』では「世間之事更相患害」(274c21)と改められている。

58) 雖不臨時應急相破 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「雖不即時應急相破」(274c22)と改められている。「應急」はHD. 7. 754aには宋代の用例が引かれている。

59) 然之愁毒 『平等覚経』の高麗蔵本には「殺之愁毒」(294a20)とあるが、誤写で宋版などの「然之愁毒」が正しい。『無量寿経』では「然含毒畜怒」(274c22)と改められている。「愁毒」は、HD. 7. 624bには『後漢書』などでの用例が引かれている。Krsh (1998). 49も参照。

60) 結憤精神 注(20)参照。

61) 剋識 「剋」は「刻」に通じる。

62) 皆當對相生値，更相報復 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「皆當對生，更相報復」(274c23)と改められている。「對相」は「更相」に同じく「互いに」の意味。Krsh (1998). 109-110を参照。後に「更相哭泣，轉相思慕，……對相顧戀」(312c1f.)とあるが、この「更相」・「轉相」・「對相」も「互いに」の意味。「生値」は仏典によく出る表現。例えば、康僧会訳『六度集経』「頼蒙宿祚，生値佛世」(T. 3, No. 152, 23c10)；竺仏念訳『出曜経』「人身難得；佛世難遇。生値中國亦復難遭。」(T. 4, No. 212, 725b15)；瞿曇般若流支訳『正法念処経』「我今生此，得善果報，生値父母。我今供養。」(T. 17, No. 721, 141a17)。

63) 獨往，獨來，獨死，獨生 『平等覚経』には「獨來，獨去，死，生」(294a22)とある。『無量寿経』では「獨生，獨死，獨去，獨來」(274c24)と改められている。

64) 當行至(趣)苦樂之處 本経の諸本には「當行至」とあるが、『平等覚経』・『無

替わってくれない。善悪の行為の（変化した）結果としての（？）⁶⁵⁾ 災いは別の生で⁶⁶⁾ あらかじめ厳然と待ちかまえている⁶⁷⁾。ひとりで昇って行き、遠く別の生に至り⁶⁸⁾、誰にも見るができない⁶⁹⁾。どこへ去っていくと、善悪の業は自動的に、転生した所まで追いかけて行く⁷⁰⁾。

ぼんやり薄暗い⁷¹⁾（輪廻の）別離は永遠につづく。たどる道が違うから、いつまた会えるか。再び出会うことはとても難しい⁷²⁾。どうして家庭の事柄⁷³⁾ を捨て去り、それぞれ元気なあいだに⁷⁴⁾、⁷⁵⁾ 努めて善業を行なわないのか。努めて精進し⁷⁶⁾、この俗世を越えることを求めれば、最高に長生きすることができる⁷⁷⁾。まったく道を

、量寿経』により、「趣」を補う。『無量寿経』には「……苦樂之地」(274c25)とある。

65) 善悪變化 難解。同じ表現が次の經典に見える。竺曇無蘭訳『鉄城泥犁経』「我見天下人所從來，善惡變化。如人視珠。」(T. 1, No. 42, 827a19)；竺曇無蘭訳『泥犁経』「佛見天下所從來生死，善惡變化。如人見珠。」(T. 1, No. 86, 909b21)。これらの經典では「變化」は梵語 *abhisamskāra*（「実行，行為」）に対応するかもしれない。

66) 殃咎異（←悪）處 底本には「殃咎惡處」とあるが、誤写。宋版など（房山石経本は欠損）および『平等覚経』(294a24)の読みに拠り改める。『無量寿経』では「殃咎異處」(274c26)と改められている。「殃咎」は古典から見える語。HD. 5. 156bには『左伝』などでの用例が引かれている。

67) 宿豫嚴待 「宿豫」は辞書類に採られていないが「あらかじめ」という意味の同義字を重ねた表現。

68) 當獨升入，遠到他處 『平等覚経』では「升入」とある以外は同じ。『無量寿経』では「當獨趣入，遠到他所」(274c27)と改められている。「升入」は、「過度解脱，能升入泥洹」(311c17)という表現で使われている。輪廻転生することを「升入」「昇入」と表現するのは、神仙思想の影響か。

69) 莫能見〈者〉 『平等覚経』・『無量寿経』の読みに拠り、「者」を補う。

70) 善惡自然迫逐所（←行）生 『平等覚経』には「……追逐往生」(294a25)，『無量寿経』には「……追行所生」(274c28)とある。本経の「行生」を『無量寿経』の読みを参考に改める。後で類似の表現が出る。すなわち、「善惡福德殃禍譴罰，追命所生，或在樂處，或入毒苦。」(314a18f.)；「壽命終身，衆惡繞歸，自然迫促，當往追逐，不得止息。自然衆惡共趣頓之（←乏）」(314c10f.)；「道之自然隨其所行，追命所生，不得縱捨。」(315a24f.)。

71) 窈窈冥冥 ぼんやり，薄暗くはつきりと見えない様。HD. 8. 441bには『淮南子・精神訓』「古未有天地之時，惟像無形，窈窈冥冥」などの例が引かれている。仏典にも多く出る。

72) 甚難〈甚難〉得復相值 「甚難」を補う。『平等覚経』(294a27)と『無量寿経』(274c29)には「甚難甚難復得相值」とある。

73) 家事 『平等覚経』(294a27)と『無量寿経』(274c29)には「衆事」とある。本経の別の箇所にも類似の表現が見える。すなわち、「何不棄世事，行求道德？」(311c29)。

74) 各曼強健時 『無量寿経』(275a1)は同じ。『平等覚経』(294a27)には「各勸強健時」とあるが、誤写。「曼」は「～の間に」の意味。ZXYL. 354-355, Zhu 110, Krsh (1998). 281を参照。注 (153) 参照。

75) 努力爲善 『平等覚経』には「努力力爲善」(294a28；宋版などは本経と同じ)，『無量寿経』には「努力勤修善」(275a1)とある。

76) 力精進 『平等覚経』の高麗藏本・房山石経は同じ。その宋版などと『無量寿経』には「精進」(275a1)とある。

77) 求度世，可得極長壽 『平等覚経』の高麗藏本・房山石経には「來度世，……」(294a28)とあるが、誤写。『無量寿経』では「願度世，可得極長生」(275a1)と改められている。本経の別の箇所にも類似の表現が見える。すなわち、「何不棄世事，行求道德？可得極長生。」(311c29)：「求欲不死，即可得長壽；求欲度世，即可得泥洹之道。」(316a21)。 /

求めようとせずに、⁷⁸⁾ いったい何を期待しているのか。何を願っているのか。

（無知・無信による苦しみ）

⁷⁹⁾ このように世間の人は、善業を行えば善果を得ることを信じない。(仏) 道を行えば道(さと)りを得ることを信じない⁸⁰⁾。死んで後の世で転生することを信じない⁸¹⁾。布施をすれば、その功德を得ることを信じない⁸²⁾。まったくこれら信じず⁸³⁾、またそんなわけはないと思ひ⁸⁴⁾、そういうことはないと言う⁸⁵⁾。しかし⁸⁶⁾、(他ならぬ)この(言動)のせいで⁸⁷⁾、遠からずこれらのことを自分で体験することになる⁸⁸⁾。⁸⁹⁾先祖から子孫へ相続される教えを代々聞き受け継いでいく。⁹⁰⁾先

、 「度世」は、仏典以前から見える表現で、本来は「俗世間を去って神仙世界にわたる」の意味。HD. 3. 1225a には『楚辞・遠遊』「欲度世以忘歸兮」などの例が挙げられている。

78) 復欲(何)須待? 欲何樂乎? 『平等覺經』の讀みに拠り「何」を補う。『無量壽經』では「安所須待? 欲何樂乎?」(275a2)と改められている。「須待」は「期待する」の意味。HD. 12. 249a には『三国志』などでの用例が挙げられている。「樂」はここでは「願う、欲する」の意味。

79) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984: 311を参照。

80) 不信 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』(275a3)では省かれている。

81) 不信死後世復生 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「不信心死更生」と改められている(275a4)。

82) 不信施與得其福德 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「惠施得福」と改められている(275a4)。

83) 都不信之 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「善惡之事都不信之」と改められている(275a4)。

84) 亦(←尔)以謂(之)不然 本經の「尔(版本はこうある。大正蔵は「爾」に改めている)以謂不然」を『平等覺經』の「亦以謂之不然」(294b3)、『無量壽經』の「謂之不然」(275a5)という讀みにより改める。「尔」(=爾)は「亦」の誤写。

85) 言(←終)無有是 本經と『無量壽經』(275a5)には「終無有是」とあるが、『平等覺經』の「言無有是」(294b3)が正しい。

86) 但 後漢・三國時代から「しかし、だが」と軽い反転を意味するようになる(志村良治『中国中世語法史研究』、三冬社 1984, p.97)。HD. 1. 1239b (5) (魏代)、ZXYL. 93 (三国志 [魏略])、GHX. 85 (公孫龍子!?, 魏略)も参照。

87) 坐是故 「坐…故」は「坐」とおなじく「～の勢で、～によって」の意味。『無量壽經』には「坐此故」とある(275a5)。

88) 且自見之 文字通りには「遠からず自分でこれらを見る」。「且」は「遠からず、まもなく」の意味。GHX. 423, (二)を参照。「之」とはこの文脈では、因果応報・輪廻転生を指すと思われる。

89) 更相代聞前後相續; 轉相承受父餘教令 この二句は対をなし、同じ意味を重複して表現している。前半は、『平等覺經』には「更相看視前後(相續?)」(294b4)とあり、『無量壽經』では「更相瞻視先後同然」(275a6)に変えられている。本經には「代聞」とあり、『平等覺經』には「看視」とあるが、「承受」と対になっている点から、「代聞」が本来的と考えられる。「更相」はここでは「次々に」の意味。HD. 1. 529a には『史記・張丞相列伝』「田文言曰: “今此三君者、皆丞相也。” 其後三人竟更相代爲丞相。何見之明也。」などの例が引かれている。「轉相」は「互いに」の意味もあるが、ここでは「次々に」の意味。訳注(三)注(20)・訳注(五)注(96)などを参照。

90) 素不作善, 本不爲道, 身愚神闇, 心塞意閉 二句毎に対をなしている。しかし『無量壽經』では「素不爲善, 不識道德, 身愚神闇, 心塞意閉」(275a7)に変えられ、対に /

祖はもともと善業・(仏)道を行ったことがなく、身も精神も暗愚で、心は閉塞して
いて、⁹¹⁾ 大いなる(仏)道を見ようとしなない。⁹²⁾ 人が死んで後おもむく境涯がある
のを見る能力がまったくないし、知る能力のある者もない。そこには善い境涯と悪い
境涯があるのを見ることもまったくないし、語ってくれる人もいない。⁹³⁾ 善悪の行
為を行うことによって、福德・災い・懲罰がそれぞれ競うように起こるのも、そうい
うわけで(?)、まったく不思議なことではない。

⁹⁴⁾ 死に至るといふ道理は次々と立ち現れてくる。⁹⁵⁾ あるいは子が父を亡くして泣
き、あるいは父が子を亡くして泣く。あるいは弟が兄を亡くして泣き、あるいは兄が
弟を亡くして泣く。あるいは妻が夫を亡くして泣き、あるいは夫が妻を亡くして泣
く。⁹⁶⁾ (老幼・兄弟・夫婦の死の)順序が逆になるのは、無常の根本の姿だ。誰もみ
な過ぎ去っていき⁹⁷⁾、永遠に留めることはできない⁹⁸⁾。

＼ ならない。

- 91) 不見大道 『平等覚経』には「不見天道」(294b6)とあるが、誤写であろう。『無量寿
経』(275a8)には対応する句がない。
- 92) 殊無有能見人死生有所趣向，亦莫能知者。適無有見善惡之道，復無語者 二つの文が
対になっている(「殊無」と「適無」，「亦莫」と「復無」など)。「平等覚経」(294b6)で
は「死生」が「生死」になっている以外は同じ。「死生」はここでは「死ぬ」という意味で
あろう(HD. 5. 148bには唐代の詩での用例が引かれている)。注(94)，(101)，(114)も
参照。『無量寿経』では「死生之趣，善惡之道，自不能見，無有語者」(275a8)と書き改め
ている。類似の表現がすでに出た(注[46]参照)。「殊無」も「適無」(注[24]参照)も
「まったく～でない」という意味。
- 93) 爲用作善惡，福德，殃咎，禍罰各自競作。爲之用，殊無有怪也 難解。『平等覚経』は
同じ。『無量寿経』では「吉凶，禍福競各作之。無一怪也」(275a9)と書き改められている。
「爲用」は類義字を重ねた表現か。「殃咎」は注(66)を参照。「禍罰」は「災いと懲罰」
の意味。HD. 7. 937bには「墨子」などでの用例が挙げられている。「爲之用」は不明。こ
こでは「このせいで」という意味か。「無有怪」は「不思議なことではない」の意味。『太
平経・某訣』に「天之授性，各自有精神。樂善，善精神至；樂惡，惡精神至。此自然之性
也，無有怪也。但愚人深計之耳。」という同じ表現が出る。
- 94) 至於死生之道，轉相續立 難解。「死生」はここでも「死ぬ」という意味であろう。注
(92)，(101)，(114)を参照。『平等覚経』には「至於生死之道轉相續(立)」(294b10)，
『無量寿経』には「生死常道，轉相嗣立」(275a10)とある。後に「或時家室，中外，父子，
兄弟，夫婦至於死生之義」(312b29)という表現が出る。
- 95) 或子哭父，或父哭子；或弟哭兄，或兄哭弟；或婦哭夫，或夫哭婦 『平等覚経』
(294b10)ではこの文が欠けている(誤写)。『無量寿経』では「或父哭子，或子哭父。兄
弟，夫婦更相哭泣」(275a10)と簡潔な形に改められている。
- 96) 顛倒上下，無常根本 『平等覚経』・『無量寿経』も同じ。西晋聶承遠訳『超日明三昧
経』に類似の表現がある。すなわち「不解法者展轉五道，猶如車輪。父母相愛，兄弟相念，
夫妻相戀，持心不堅。若爲父母，反爲子女。本爲子女，反爲父母，或爲夫妻，更爲怨家。
顛倒上下無常根本。此菩薩意常慈念之，開化使信，入佛正道，信解非常・苦・空・非身。」
(T. 15, No. 638, 538a22f.)。
- 97) 過去 ここでは「過ぎ去る」の意味。漢訳仏典から見える表現。HD. 10. 958a. 過去
(3)には『朱子語類』などでの用例が引かれている。
- 98) 不可常得 『平等覚経』は同じ。「得」は難解。「留める」の意味か。『無量寿経』では
「不可常保」(275a12)と改められている。注(151)参照。

教え語り、論しても⁹⁹⁾、この道理を信じるものは少ない¹⁰⁰⁾。みな生死を繰り返し¹⁰¹⁾、とどまることはない。(しかし)このような人々は¹⁰²⁾、ぼんやりしていてあちこちで衝突し¹⁰³⁾、教えの言葉¹⁰⁴⁾を信じず、それぞれ心を楽しませることを求め、思慮がない¹⁰⁵⁾。(彼らは)愛欲に理性を失い¹⁰⁶⁾、道徳をわきまえず¹⁰⁷⁾、怒りのために惑い¹⁰⁸⁾、財産や女色を貪っている¹⁰⁹⁾。このために(仏)道を得ず、当然苦しみの極みを受け¹¹⁰⁾、悪い境涯に(再び)生まれ、決してとどまることはできない¹¹¹⁾。その苦痛はたましいかぎりだ¹¹²⁾。

(愚昧な追慕)

¹¹³⁾ 家族・父方や母方の親戚・父(312c)子・兄弟・夫婦の死(ぬという道理)に

-
- 99) 教誨開導 「教誨」は辞書類に採られていない。「開導」は古典から見える表現で、HD. 12. 64aには『荀子』などでの用例が引かれている。
- 100) 信道者少 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「信之者少」(275a13)と改められている。
- 101) 皆當死生 『平等覚経』には「皆當生死」(294b12)とある。『無量寿経』では「是以生死流轉」(275a13)と改められている。あるいは「死生」はここでも「死ぬ」という意味であろうか。注(92), (94), (114)を参照。
- 102) 如是曹人 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「如此之人」(275a13)と改められている。複数を表す「曹」は先秦代の文献から見える(GY. 129参照)。Zhu. 172には仏典での用例が列挙されている。
- 103) 朦冥抵突 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「朦(v. u. 蒙, 朦)冥抵突」(275a14)とある。本経には「閉塞朦冥」(312c5)という表現が出る。「朦冥」, 「朦冥」, 「蒙冥」, 「朦冥」などは同義字を重ねた表現。辞書類には採られていない。逆に「冥蒙」(HD. 2. 454b), 「冥朦」(HD. 2. 457a), 「冥朦」(HD. 5. 820a)などは辞書に採られている。「抵突」は類義語を重ねた表現で「ぶつかる, つきあたる」の意味。HD. 6. 477aは『三国志』などの用例を引いている。
- 104) 經語 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』には「經法」(275a14)とある。
- 105) 各欲快意, 心不計慮 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「心無遠慮, 各欲快意」(275a14)と改められている。
- 106) 愚癡 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「癡惑」(275a15)と改められている。
- 107) 不解 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「不達」(275a15)と改められている。
- 108) 迷惑 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「迷没」(275a15)と改められている。
- 109) 貪狼 HD. 10. 107aには『淮南子』などの用例を引いている。「狼のように貪る」と解釈するのは間違いで、「貪婪」(tán lán)が転じたものという(王雲路『漢魏六朝詩歌語言論稿』西安 1997, 陝西人民教育出版社, p. 303-304)。
- 110) 當更勤苦極 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「當更惡趣苦」(275a16)と改められている。「更」は「(苦しみを)受ける」という意味。本経では「悪い境涯に陥る」の意味でも使われている。訳注(一)注(54)を参照。「勤苦」は注(29)を参照。
- 111) 在惡處生, 終不得止休息 『平等覚経』には「在於惡處生。……」(294b15)とある。この読みの方がよい。『無量寿経』では「(當更惡趣苦,) 生死無窮已」(275a17)と改められている。「止休息」は類義字を三つ重ねた表現。本経の別の箇所に出る「壽命終身, 衆惡繞歸, 自然迫促, 當往追逐, 不得止息」(314c11); 「考掠勤苦之處見阿彌陀佛光明至, 皆休止, 不復治」(303a15)という表現を参照。
- 112) 痛之甚可傷 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「哀哉甚可傷」(275a17)と改められている。

直面すると¹¹⁴⁾、互いに声を出して泣き、涙を流し、互いに追慕する¹¹⁵⁾。憂いが心のうちに鬱積し¹¹⁶⁾、恩愛がまとわりついて離れない¹¹⁷⁾。心は痛みに襲われ¹¹⁸⁾、互いに恋々として思いきれず¹¹⁹⁾、(その悲しみは)昼となく夜となく結ばれ束縛し、(それから)解放される時がない¹²⁰⁾。仏道の恩恵を教え示しても¹²¹⁾、心を開いて受け容れず、(亡き人との)愛情を想い、情欲が身を離れず¹²²⁾、心をつっかり閉ざしてもう

- 113) 或時家室中外 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「或時室家」(275a17)と改められている。「或時」はここでも「～場合は」の意味であろう。注(48)を参照。
- 114) 至於死生之義 『平等覚経』には「至於生死之義」(294b17)とある(誤写?)。『無量寿経』では「一死一生」(275a18)と改められている。上に「至於死生之道、轉相續立」(312b21)という表現が出た。注(94)を参照。「死生」はここでも「死ぬ」という意味であろう。注(92)、(94)、(101)を参照。「死ぬ」という道理に直面して」という意味か。
- 115) 更相哭涙(←泣)、轉相思慕 底本の「哭泣」を本経の宋版など(房山石経本はこの部分欠損)と『平等覚経』(294b17)により「哭涙」と改める。「哭涙」は本経の類似の文脈で出る。すなわち「展轉是五道中、死生呼嗟、更相哭涙、轉相貪慕、憂思愁毒、痛苦不可言」(313a28)。なお「哭泣」は類義字を重ねた表現(HD. 3. 362aには「礼記」などの用例が引かれている)。『無量寿経』では「更相哀愍、恩愛思慕」(275a18)と改められている。「更相」・「轉相」は「互いに」の意味。注(62)を参照。
- 116) 憂念憤結 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「憂念結縛」(275a19)と改められている。「憤結」はすでに出た「結憤」と同じ意味。注(20)を参照。憂いや怒りが心に鬱積していること。HD. 7. 733bには『北史』での用例が引かれている。次の「恩愛繞續」と対をなす。
- 117) 恩愛繞續 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では省かれている。「繞續」は他に例を見ない表現。「まとわり続く、まとわって離れない」という意味か。上の「憂念憤結」と対をなす。
- 118) 心意著痛 『平等覚経』(294b18)と『無量寿経』(275a19)には「心意痛著」とある。「心意著痛」は沮渠京声訳『諫王経』にも出る。「人命欲終、身體不寧……白汗目涙流出相續、心意著痛、識轉消滅、無所復知。」(T. 14, No. 514, 786a17f.)。この「著痛」は「痛みに襲われる。痛みを受ける」という意味であろう。HD. 9. 168a. 着(3), GHZ, p. 963b. 着(著)(3), (5)を参照。もし「痛著」が正しければ、この「著」は動詞の後について、状態・行為の持続を示す最も早い例となる。その様な用法に関しては、柳士鎮『魏晉南北朝歴史語法』南京1992: 南京大学出版社, p. 115; ZXYL. 636f.; HD. 9. 430b. 著(8); 龍国富『姚秦訳経助詞研究』長沙2004: 湖南師範大学出版社, pp. 64ff.などを参照。
- 119) 對相願戀 『平等覚経』には「對相願戀(←思)」(294b18)とあり、『無量寿経』では「迭相願戀」(275a19)と改められている。「對相」は「互いに」の意味。注(62)を参照。「願戀」は「恋々として思いきれない」という意味。HD. 12. 366bには『後漢書』などで用例が引かれている。
- 120) 晝夜縛礙、無有解時 『平等覚経』の「晝夜無有解時」(294b19)は誤写。『無量寿経』では「窮日卒歲無有解已」(275a19)と改められている。「縛礙」は竺法護訳『等目菩薩所問三昧経』「普賢菩薩志願、彼無縛礙」(T. 10, No. 288, 576a27); 鳩摩羅什訳『大樹緊那羅王所問経』「知一切法本性寂靜、本無縛礙故。」(T. 15, No. 625, 385c5); 同「出家是離縛礙之器。」(T. 15, No. 625, 385c8)と出る。
- 121) 教視道德 房山石経本及び『平等覚経』(294b19)には「教示」とある。『無量寿経』では「教語」(275a20)と改められている。「道德」は訳注(七)注(100)を参照。なお、「示す」の意味で「視」を使うのは古い用法であり、『詩経』・『礼記』・『漢書』などに多くの用例が見られる(HD. 10. 332b [15], GH. 2087c-d [47]-[58])。「視」と「示」の交替は本経の他の箇所でも見られる。本経に「開示大道」(313a1)とあるところ、『平等覚経』に「開視(v. l. 示)天(v. l. 大)道」(294c16)、『無量寿経』に「顯示大道」(275b11)とある。また本経に「開視(v. l. 示)五道」(313a21)とあるところ、『平等覚経』に「開示(v. l. 視)五道」(295a8)、『無量寿経』に「開示五趣」(275b27)とある。

ろうとしており、(蒙昧さに)幾重にも覆われていて¹²³⁾、(彼らは)思考したり、心をきちんとただしたり、世俗のことからすっぱり身をひき、ひたすら道を修めたりすることができない¹²⁴⁾。最後までふらふらして¹²⁵⁾、寿命が尽きても¹²⁶⁾、仏道を得られず、もうどうしようもない¹²⁷⁾。

(私利追求の生活が悪趣を招く)

¹²⁸⁾ (世間では)多くの雑事に(追われており)(?)、混乱し、かまびすしく¹²⁹⁾、みな愛欲を貪り求めている。¹³⁰⁾ 仏法とは上で述べた様なものだが(?)、仏道を理解しない人は多く、仏道を得た人は少ない。¹³¹⁾ 世間の人はせかせかして、心を

122) 思想恩好, 情欲不離 『平等覚経』には「恩愛・情欲不離」(294b20)とある。『無量寿経』では「思想恩好, 不離情欲」(275a20)と改められている。「恩好」は、夫婦・家族・友人などの間の愛情・よしみ・むつまじさ。訳注(六)注(125)を参照。

123) 閉塞矇瞶, 交錯覆蔽 『平等覚経』には「閉塞蒙蒙, ……」(294b20)とある。『無量寿経』では「昏矇閉塞, 愚惑所覆」(275a21)と改められている。「閉塞」「矇瞶」「交錯」「覆蔽」は同義字・類義字を重ねた表現。「閉塞」は本経の別の箇所にも「心中閉塞, 意不開解」(315a20)と出る。「矇瞶」は注(103)を参照。「覆蔽」は「覆う; 覆い隠す, 隠しごまかす」の意味。HD. 8. 770bには『漢書』などでの用例が引かれている。

124) 不能思計, 心自端正, 決斷世事, 專精行道 『平等覚経』には「不得思計……」(294b20)とある。『無量寿経』では「不能深思熟計, 心自端政 (v. l. 正), 專精行道, 決斷世事」(275a21)と改められている。「思計」は辞書類にとられていないが、仏典には多出する。同義字を重ねた表現。「決斷」も同義字を重ねた表現。「すっぱり断つ」の意味。後に「若曹亦可自決斷臭惡露。」(313b5)という同じ意味の用例が見える。

125) 便旋至竟 『平等覚経』・『無量寿経』も同じ。「便旋」(pián xuán)は同じ韻字を重ねた疊韻語。「さまよう; ぐるぐる回る」の意味。HD. 1. 1366aには漢代の賦などでのこの意味の用例が引かれている。他方、竺大力・康孟詳訳『修行本起経』「夫老者, 年耆根熟, 形變色衰, ……坐起須人, 目冥耳聾, 便旋即忘, 言輒悲哀, 餘命無幾。故謂之老。」(T. 3, No. 184, 466b25f.); 支謙訳『八師経』「百節痛疼, 行歩苦極, 坐起呻吟, 憂悲惱苦, 識神轉滅, 便旋即忘, 命日促盡, 言之流涕。」(T. 14, No. 581, 965c15f.)の「便旋」(biàn xuán)は「すぐに」という類義字を重ねた表現か。

126) 壽終命盡 『平等覚経』には「年壽命盡」(294b22)とあり、『無量寿経』では「年壽終盡」(275a23)と改められている。

127) 無可奈何 『平等覚経』(294b22)・『無量寿経』(275a23)には「無可奈何」とある。

128) 以下の部分, 諸本との対照は, 香川 1984: 313を参照。

129) 總猥憤譏 「總猥」は, HD. 9. 997aでは漢代, 王符『潜夫論』や魏代, 劉劭『人物誌』での用例が挙げられ, 「集まっている様子」とある。康僧会訳『六度集経』「王曰: “國事多故, 且坐苑中。” 太子令之深處苑内。王事總猥, 忘之六日。忽然悟曰: “梵志故在乎?” 疾呼之來。」(T. 3, No. 152, 30a27f.) および僧伽跋澄等訳『僧伽羅刹所集経』「衆生之類衆事總猥, 著有常想。無有能除其總猥者, 除其智者。」(T. 4, No. 194, 117b4f.)の「總猥」は「雑多な事柄, 多くの雑事」の意味か。「憤譏」の「憤」は「ごたごたして混乱している様子」。仏典では「憤鬧」(混乱しがやがやとした[場所])という表現がよく出る。「譏」は, 「喧嘩, がやがやしている」という意味。訳注(七)注(102)参照。

130) 如是之法, 不解道者多, 得道者少 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「惑道者衆, 悟之者寡 (v. l. 少)」(275a24)と改められている。

131) 世間忽忽, 無可聊賴 『平等覚経』・『無量寿経』も同じ。「忽忽」は「あたふた, そそくさ, あわただしい」あるいは「あくせく, 忙しい」という意味。HD. 7. 447bには『三国志』などでの用例が引かれている。「聊賴」は同義字を重ねた表現。「生活上あるいは /

落ち着けるところがない。¹³²⁾ 位の高い者も低い者も、金持ちも貧乏人も、¹³³⁾ 男も女も、大人も子供も、¹³⁴⁾ みなあわただしく、自分を苦しめ、みな殺意・害意をいだいていて¹³⁵⁾、悪意がたまってもうろうとしており¹³⁶⁾、憂いを感じない者はいない¹³⁷⁾。そのためでたらめに行動し¹³⁸⁾、天地（の道理）に逆らい¹³⁹⁾、人間らしい心に背いている¹⁴⁰⁾。¹⁴¹⁾（仏）道の働きは、悪人にまずはそのまま好きなようにさせておいて、その（授かった）寿命がまだ尽きないうちに、突然その命を奪う。悪趣に落ち、幾世にわたって苦しみを受け¹⁴²⁾、次から次へと悩み苦しみが絶えず¹⁴³⁾、数千万億年にわたって¹⁴⁴⁾ ずっとそこから出られない¹⁴⁵⁾。その苦痛はことばで表現できな

- 、精神上）頼りにする。あてにする」。多くの場合否定辞を伴う。HD. 8. 662aには漢代の詩などでの用例が引かれている。『無量寿経』の流布本には「憍頼」とある。「憍」(liáo)は「聊」(liáo)に同じ。
- 132) 豪貴貧富 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「貧富貴賤」(275a25)と改められている。
- 133) 男女大小 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では省かれている。
- 134) 各自忽務、勤苦躬身 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「勤苦忽務」(275a26)と改められている。「忽務」は「あわただしい、忙しい」の意味。訳注(六)注(127)参照。「躬身」は「自分自身」の意味。HD. 10. 708aには『国語』などでの用例が引かれている。「勤苦」はここでは「苦しめる」の意味。注(29)を参照。
- 135) 〈各〉懷殺毒 本経の高麗蔵本と房山石経には「懷殺毒」とあり、宋版などには「懷怨殺毒」とある。『平等覚経』(294b25)・『無量寿経』(275a26)には「各懷殺毒」とある。この読みを採る。「殺毒」は、ここでは「殺したり、危害を加えたりする」という意味か。HD. 6. 1491aには『後漢書』での用例が引かれているが、そこでは「毒殺」の意味。
- 136) 惡氣窈冥 「惡氣」は「邪惡な氣」あるいは「うらみ・怒りの(たまった)気持ち」。HD. 7. 557bには『呂氏春秋』などでの用例が引かれている。「窈冥」は上に出た「窈窈冥冥」(注[71])と同じく、「ほんやり、薄暗くはつきりと見えない様」を意味する。HD. 8. 441bには『史記』などでの用例が引かれている。
- 137) 莫不惆悵 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では省かれている。「惆悵」は類義字を重ねた表現。「失意・失望して悲しむ、憂える」の意味。HD. 7. 601aには『楚辞』などでの用例が引かれている。
- 138) 爲妄作事 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「爲妄興事」(275a26)と改められている。
- 139) 惡逆天地 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「違逆天地」(275a27)と改められている。「惡(wù)逆」は「憎み逆らう；逆らう」の意味。
- 140) 不從人心 『無量寿経』は同じ。『平等覚経』には「不從仁心」(294b26)とある。
- 141) 道德非惡先隨與之恣聽所爲 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「自然非惡先隨與之恣聽所爲、待其罪極」(275a27)と改められている。「道德」はここでは「(仏)道の働き、作用」の意味か。「非惡」は辞書類に採られていないが、同義字を重ねた表現で、「惡逆非道の者、惡人」の意味。「恣聽」も同義字を重ねた表現で、「まかせせる。言うとおりにする」の意味。HD. 7. 506bには晋代、袁宏『後漢紀』などでの用例が引かれている。
- 142) 累世勤苦 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』の流布本・宋版なども同じ。諸本で「勤苦」とあるところ、『無量寿経』の高麗蔵本・房山石経本は「𢀛苦」にするが、これは「𢀛(=勤)苦」の誤写。
- 143) 展轉愁毒 『平等覚経』は同じ。『無量寿経』では「展轉其中」(275a29)と改められている。「展轉」はここでは「次々に」の意味。訳注(五)注(95)を参照。「愁毒」は注(59)参照。
- 144) 數千萬億歲 本経の高麗蔵本・房山石経本及び『平等覚経』にはこうある。本経の宋版などには「數千萬億億歲」とあるが、誤写。『無量寿経』では「數千億劫」(275a29) /

いほど。まったくあわれなことだ。」

(悪業を止め、善業をなせ)

仏は阿逸菩薩などと神々・帝王・人々に仰った。

「¹⁴⁶⁾ 私はお前たちに世間のことをすっかり話した。¹⁴⁷⁾ 人々はこのような理由で仏道を得られないでいる。¹⁴⁸⁾ お前たちはこのことをよくよく考えよ。¹⁴⁹⁾ 悪業から手を引き、それから遠ざかれ。¹⁵⁰⁾ 善業をなすなら、そのことを堅持し、みだりに悪いことなどせず、大いに善業を行え。¹⁵¹⁾ 愛情・欲望の享受は、それが大きなものでも小さなものでも、多かろうと少なかろうと、永遠に留めることはできず、¹⁵²⁾ やはり捨て去らねばならず、楽しんでではない。

¹⁵³⁾ 仏(わたし)の(在)世の間に、奥深い仏の教えの言葉を信じ受け入れ、¹⁵⁴⁾

と改められている。

- 145) 無有出(←止)期 本經の諸本には「止期」とあるが、『平等覺經』・『無量壽經』の読みにより「出期」に改める。
- 146) 我皆語汝曹(←造)世間之事 本經の高麗藏本の「汝造」(房山石經本はこの部分欠損)は「汝曹」の誤り。本經の宋版などと『平等覺經』(「若曹」とある)の読みにより改める。「曹」が「遣」と誤写され、さらにそれと通じる「造」に置き換えられたと思われる。『無量壽經』では「我今語汝世間之事」(275b2)と改められている。
- 147) 人用是故坐不得道 「用是故」は「この理由で」の意味。訳注(六)注(76)を参照。「坐」も「～のせいで、～によって」の意味。訳注(三)注(48)、訳注(六)注(75)を参照。
- 148) 汝曹熟思惟之 『平等覺經』には「若曹……」(294c3)とある。『無量壽經』では「當熟思計」(275b3)と改められている。
- 149) 惡者當縱捨、遠離之去 『平等覺經』には「……、遠離之」(294c3)とある。『無量壽經』では「遠離衆惡」(275b3)と改められている。「縱捨」は、上に「釈放する。赦す」の意味で出たが(注[24])、ここでは「手を引く。捨てる」の意味であろう。この意味は辞書類に採られていない。
- 150) 從其善者、當堅持(之)、勿妄爲非、益作諸善 本經の諸本には「當堅持」とあるが、『平等覺經』(294c4)により「之」を補う。『無量壽經』では「擇其善者勤而行之」(275b4)と改められている。「益」はここでは「大いに」の意味。訳注(三)注(51)を参照。
- 151) 大小多少愛欲之樂皆不可常得 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では「愛欲榮華不可常保」(275b4)と改められている。ここの「得」も「留める」の意味か。注(98)を参照。ここの「樂」は「楽しみ」の意味か。HD. 4. 1226a (5)、GH. 1141a (35)には『尚書』・『国語』での用例があげられている。
- 152) 由當別離、無可樂者 『平等覺經』(294c5)には「猶當別離、……」とある。『無量壽經』では「皆當別離、……」(275b5)と改められている。「由」は「猶」に通じる。ここの意味は明確ではない。
- 153) 曼佛世時 『平等覺經』(294c6)には「勸(v. II. 勸、曼)佛世時」とあるが、誤写。「曼」は「～の間に」の意味。注(74)参照。『無量壽經』では「曼佛在世」(275b5)と改められている。
- 154) 其有信受佛經語深、奉行道德、皆是我小弟也 『平等覺經』(294c6)には「其有信受(v. I. 受)佛經語(v. I. 語)深、奉行道德、皆是我小弟(v. I. 弟子)也」とあるが、「愛」・「諸」は誤写。『無量壽經』では「當勤精進」(275b5)と改められている。「信受」については訳注(六)注(29)を見よ。「佛經語」については訳注(六)注(27)を見よ

悟りのための修行をおしただいて実行する者がいれば、彼らはみな私の弟たちだ。¹⁵⁵⁾ 仏の教えに基づく戒を学ぼうとおもい始めたばかりの者がいれば、彼らはみな私の弟子たちだ。¹⁵⁶⁾ もし出家して、妻子を捨て、財産や女色を捨て、沙門となり、(さらに) 仏(わたし)のもとで比丘になりたい者がいれば、彼らはみな私の子孫たちだ。

¹⁵⁷⁾ 私の(いる)時代に巡り合うのは大変難しい。¹⁵⁸⁾ もし、阿弥陀仏の国に生まれたいと願う者がいれば、彼らは智慧あり、勇敢なものとなり、みんなに尊敬されるであろう。¹⁵⁹⁾ 好き勝手にして、仏の教えに基づく戒に背き、他の人より劣ってはならない。

もし疑問があり、教え¹⁶⁰⁾ が理解できない者がいれば、¹⁶¹⁾ 前に進み出て仏(わたし)に尋ねよ。あなた方に説明してあげよう。」

よ。ここの「道徳」は「悟りのための修行」の意味であろうか。「道徳」は本經の別の箇所では、「仏道の恩恵」・「さとりのはたらき」・「さとりそのもの」・「(仏)道の働き、作用」を意味する。訳注(二)注(70)、訳注(五)注(143)、訳注(七)注(75)、同注(100)、本篇注(141)を参照。

- 155) 其有甫欲(←欲有甫)學佛經戒者，皆是我弟子 本經には「其欲有甫學佛經戒者，……」とあるが、『平等覺經』(294c7)の読み改める。『無量壽經』では省かれている。「其」は「もし」の意味。HD. 2. 102a(4)(3), GHX. 407bは『呂氏春秋』・『荀子』などでの用例を引いている。「甫」は「～したばかり」の意味。HD. 1. 525a(3), GHX. 162には『漢書』などでの用例が引かれている。「經戒」については訳注(一)注(53)を参照。
- 156) 其有欲出身去家，捨妻子，絕去財色，欲作沙門，爲佛作比丘者，皆是我子孫 『平等覺經』には「……，欲來作沙門，……」(294c9)とある。『無量壽經』では省かれている。「出身去家」の「出身」はここでは「出家する」の意味。この意味は辭書類に採られていない。次の「出身」も同じ意味。東晉代、竺曇無蘭訳『五苦章句經』「若有賢者，居家爲道，厭世所有苦空非身，常欲出身爲道，辭家妻子，當就明師，受持法服。」(T. 17, No. 741, 545a14f.); 唐代道宣撰『廣弘明集』「『道士法輪經』言：“若見沙門，思念無量，願早出身，以習仏眞。”」(T. 52, No. 2103, 162a17f. ≒ 169a25f.)。「絶去」は類義字を重ねた表現。「爲佛」は「仏のもとで」の意味であろう。HD. 6. 1106b(31)(3), GH. 1387b(92)-(101)には、「爲」が「于」「於」「在」の意味になる例を『晏氏春秋』などから引いている。
- 157) 我世甚難得值 『平等覺經』は同じ。『無量壽經』では省かれている。
- 158) 其有願欲生阿彌陀佛國者，可得智慧勇猛，爲衆所尊敬 『平等覺經』には「其有願欲生無量清淨佛國者，……」(294c10)とある。『無量壽經』では「其有至(v. i. 至心)願生安樂國者，可得智慧明達功德殊勝」(275b6)と改められている。「智慧勇猛」は訳注(一)注(8)を参照。
- 159) 勿得隨心所欲，虧負經戒，在於人後 『平等覺經』には「……在(於)人後」(294c12)とある。『無量壽經』では「勿得……在人後也」(275b7)と改められている。「虧負」は同義字を重ねた表現。「虧」にも「法令などに背く」の意味がある(HD. 8. 851a[6])。
- 160) 經 ここでも「經典」ではなく、「教え」の意味。訳注(一)注(19)を参照。
- 161) 復前問佛。爲汝解之 『平等覺經』には「……佛當爲若解之」(294c13)とある。『無量壽經』では「可具問佛。當爲說之」(275b8)と改められている。ここの「復」の意味は明らかでない。

略号表

注で使用した略号は次の通り：

GH = *Gūxūn Huizūān* 故訓匯纂, ed. Zong Fubang 宗福邦, Chen Shinao 陳世鏡, Xiao Haibo 蕭海波, 北京 2003 (商務印書館).

GHX = 『古代漢語虛詞詞典』中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編, 北京 1999 (商務印書館).

GHZ = 張永言等編『簡明古漢語字典』成都 1986 (四川人民出版社).

GY = 楊伯峻・何樂士『古漢語語法及其發展』北京 1992 (語文出版社).

HD = 『漢語大詞典』, 全13冊, 上海 1986—1994 (漢語大詞典出版社).

Hu = 胡敕瑞『《論衡》與東漢佛典詞語比較研究』, 成都 2002 (巴蜀書社).

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).

Zhu = 朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).

ZXYL = 董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).

香川 1984 = 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』, 京都 1984 (永田文昌堂).

訳注(一) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(一)』『佛敎大学総合研究所紀要』第6号(1999), pp. 135-150.

訳注(二) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(2)』『佛敎大学総合研究所紀要』第7号(2000), pp. 95-104.

訳注(三) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(三)』『佛敎大学総合研究所紀要』第8号(2001), pp. 133-146.

訳注(四) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(四)』『佛敎大学総合研究所紀要』第10号(2003), pp. 27-34.

訳注(五) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(五)』『佛敎大学総合研究所紀要』第11号(2004), pp. 77-96.

訳注(六) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(六)』『佛敎大学総合研究所紀要』第12号(2005), pp. 5-20.

訳注(七) = 辛嶋靜志『【大阿弥陀經】訳注(七)』『佛敎大学総合研究所紀要』第13号(2006), pp. 1-11.

英文タイトル：

An Annotated Japanese Translation of the Earliest Chinese Version of the *Sukhāvaiṣyūha* (8)